

「旅の至福」 第6回

ドーヴァー海峡を渡るユーロスターとムール貝

昨年夏、私たちが乗車したユーロスター（仏名ル・シャトル）は、午前10時過ぎにロンドン・ウォータールー駅を発った。これまでに何度か海峡をフェリーで往復してみても、その味わい深い旅の魅力も忘れ難かったが、英仏両国が国家の威信を賭け、大英帝国とヨーロッパ大陸を結ぶ鉄道建設に委ねた近代科学の粋にも触れて見たかった。

ユーロスターは、1981年に英仏両政府からプロジェクトが正式発表され、その建設がスタートして、13年の年月と1兆8千億円の巨費を投じて1994年完成された。海峡海底には往復車線の他に、保守管理列車用を加え計3本のトンネルを貫通させた。トンネルの長さは50.45km、海底トンネルの長さは、世界最長の38kmを誇っている。

その日、6月12日は偶々札幌でワールドカップのイングランド対アルゼンチン戦が行われ、興奮したイギリス人のエールと歓声でガラスをふんだんに使った、明るい待合室のテレビ周辺だけは熱気でむんむんしていた。出発時間が近づくと案内表示に従い、ドーム型のプラットフォームに誘導されて可愛いホステスさんに迎えられ、比較的空いている一等座席に身を落ち着けた。通路を挟んで二人席と一人席のゆったりしたシート・アサインである。ユーロスターはロンドンを離れるや速度を上げ、市街や、平坦な牧草地を淡々と通り過ぎていった。ドーヴァー海峡を潜る前に洒落たコース・ランチが提供された。ややコンパクトな感じではあったが、前菜からメインディッシュ、デザートとコーヒーがつき、そしてにこやかなアテンダントのサービスを受け、それはそれで列車内の食事としては、満足できるものだった。

気がついたときには、私たちは海底トンネルを潜り抜け、フランス領カレー郊外を走っていた。客車内の設備や、車窓風景に気をとられている間にリール・ヨーロッパ駅に到着した。ここで、列車はパリ行、ブリュッセル行の2方面に分かれる。時計を1時間進めて暫くすると、右手幽かにベルギー王家の菩提寺であるノートルダム教会の壮大な尖塔が見えてきた。ほどなくしてユーロスターはベルギーの首都ブリュッセル・ミディ駅へ滑り込んだ。僅か2時間半のセンチメンタル・ジャーニーならぬファスト・ジャーニーであった。

しかし、近代科学具現の旅は、効率性や、ハイスピード、清潔感、快適な居住性などを呼び込む反面、無機質で旅の本質である人々との触れ合いとか、情緒をあまり感じさせてはくれない。まだイギリスのイメージが残像する中で、頭が思うようにヨーロッパ大陸に追いついて来ないのだ。疲れて頭がぼお～としているわけではなく、どうも海を渡り国を越え、いま漸くベルギーへ辿り着いたという感覚的な切実感と臨場感が乏しいのである。

旅の本質と魅力は、やはり時間をかけ、歩いて彷徨って、未知の人々との出会いを経て、漸く辿り着く長い道程の中にこそ、発見されるべきではないだろうか。急ぐ旅には、確かに速く便利な鉄道ではある。だが、旅人の心に訴えるには何か欠けている。人恋しさと

か、好奇心が触発されるのが、旅の底流にあるセンチメンタリズムではないかと思う。あまりにも効率的で、無機質な感じのユーロスターは、はっきり言っていつまでも心に残る旅と呼ぶには、いささか期待外れであった。

むしろヴィクトル・ユーゴーが「世界で最も美しい広場」と賞賛した、ブリュッセル中心街のグラン・プラスで、その晩食した名物ムール貝にこそ情緒的な旅を感じた。バケツに山盛りのムール貝を目の前にど〜んと出され、ワインと一緒に武者ぶりついたムール貝は、正に感覚的な旅を感じさせ、旅を一層ノスタルジックなものにしてくれたのである。

(近藤節夫記)